

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2018.7) 平成29年度:69.

急性期病棟における変則2交代12時間勤務導入による効果と課題

田中 理佳, 本間 美穂, 宮地 実穂子, 國本 紅美子, 飯崎
あずさ, 山本 麻美子, 中野 美咲都, 本間 理紗

急性期病棟における変則 2 交代 12 時間勤務導入による効果と課題

キーワード：変則 2 交代 超過勤務 疲労蓄積度自己診断 勤務体制 交代制勤務

○田中理佳 本間美穂 宮地実穂子 國本紅美子 飯崎あずさ 山本麻美子 中野美咲都 本間理紗
旭川医科大学病院 6 階東ナースステーション

I. 目的

A 病院急性期病棟は、消化器外科、移植医療のみならず、がんの集学的治療、緩和ケア等がん看護全般を担っている。H27 年度 1 人当たりの月平均超過勤務時間（以下超勤）は 15.57 時間の状況を危機と捉え、3 交代から 2 交代へ勤務体制の変更をした。平成 28 年 10 月より、変則 2 交代 12 時間勤務（以下変則 2 交代）を導入し、大幅な超勤削減の成果が得られたため、変則 2 交代の体制変化がもたらした効果と課題を明らかにする。

II. 方法

1. 研究期間：平成 28 年 9 月～平成 29 年 5 月
2. 調査対象：急性期病棟に勤務する看護師 34 名
3. 変則 2 交代勤務の導入：夜勤は 12 時間（20：00-9：00）とし、長日勤（8：30-21：15）を導入した。
4. 調査方法：導入前・3 か月後に無記名自記式質問紙にて調査をした。
5. 調査内容：
 - 1) 超勤と連続休暇：変則 2 交代導入前後の病棟看護師の年間平均超勤を比較し、導入後 3 か月（11～1 月）の超勤と連続休暇取得率、連続休日取得率を前年度（11～1 月）と比較した。
 - 2) 変則 2 交代導入前後のニーズと業務評価調査をした。
 - 3) 疲労蓄積度自己診断結果：厚生労働省が作成したチェックリスト¹⁾を使用し、変則 2 交代導入前後の評価を実施した。
 - 4) 統計分析：疲労蓄積度自己診断結果は、Wilcoxon の符号順位検定による統計解析を行い、有意水準 5% 以下を有意差ありとした。

III. 倫理的配慮

所属大学の倫理委員会の承認を得た上で実施した。

IV. 結果

研究対象者 34 名に質問紙を配布。回収率は 100%。

平成 28 年度の超勤は 12.4 時間、平成 27 年度は 15.57 時間。変則 2 交代導入後 3 か月間は 7.46 時間、前年度同時期は 20.5 時間であった。

連続休暇取得率は、前年度（11～1 月）3 連休 29%、導入後 69%、前年度 2 連休 79%、導入後 90%だった。3 か月間で月に 2.3 連休両方の取得率は、前年度 63%、導入後 94%、連続休日取得率は前 67.3%、後 90.2%だった。

【変則 2 交代導入前後のニーズと業務評価結果】

変則 2 交代導入に賛成は、導入前が 85%、3 か月後は

100%であり、3 か月後で変則 2 交代を全員が継続したいと回答した。継続を希望する理由は、「休暇の充実」94%、「身体的メリット」32%等であった。変則 2 交代への不安・心配がある・どちらでもないという回答は導入前 82%、3 か月後 48%で、導入前の理由は、「新たな体制への不安」が 38%と最も多く、3 か月後は「長日勤の負担」が 32%と最も多かった。3 か月後調査の超勤が削減された理由は、「ルールによって引き継ぎがスムーズになった」62%、「時間管理の意識向上」62%「マニュアルが良かった」21%だった。

【疲労蓄積度自己診断結果】

本チェックリストは、労働者の仕事による疲労蓄積を、自覚症状と勤務の状況から判定するものである。自覚症状において、最も仕事の負担が低いとされる I は、導入前 32%、3 か月後 50%と増加した。具体的な症状として有意な症状の改善を認めたのは「ゆううつだ」（ $p < 0.05$ ）

「以前と比べて疲れやすい」（ $p < 0.05$ ）であった。勤務の状況において、最も負担が低いとされる A は、導入前 15%、3 か月後は 32%であった。勤務の状況として有意な改善を認めたのは、「夜勤に伴う身体的負担」（ $p < 0.001$ ）「休日を有効活用」（ $p < 0.001$ ）「疲労が次の勤務までに回復」（ $p < 0.001$ ）「患者が安心できる体制」（ $p < 0.001$ ）であった。仕事に対する負担度が低いと考えられる点数 0～1 が、導入前 38%、3 か月後で 74%であった。

V. 考察

変則 2 交代の導入による効果は、超勤削減（指標達成）と連続休暇・休日取得率の向上であった。さらに、自覚症状では、「ゆううつ」「疲れやすい」、勤務負担では、「夜勤に伴う身体的負担」「休日の有効活用」「疲労が次の勤務までに回復」の項目が有意に改善され、これらは超勤削減と連続休暇・休日取得率向上による WLB の充実が関与した結果であると考えられる。超勤の削減は、マニュアル・ルールによって時間管理意識が高まり「患者に安心できる体制」が整備されたものとする。今後の課題は、長日勤の負担軽減である。

VI. 結論

1. 変則 2 交代による効果は、超勤削減と連続休暇・休日取得率の向上につながり、自覚症状・勤務状況から判断する疲労蓄積度の低減につながった。
2. 変則 2 交代継続の課題は、長日勤の負担軽減である。

VII. 参考文献 1) 厚生労働省：<http://www.mhlw.go.jp>